

# 続・辞書からみた「技術」と「技能」

職業能力開発総合大学校 研修課 佐野 豊

## 1. はじめに

1995年に「辞書からみた「技術」と「技能」雑感」(「技能と技術」誌1995年1号<sup>a)</sup> 須藤 秀樹氏) (以下 [雑感]) が掲載されており、興味深く拝見させていただいた。

[雑感] は、「技術」「技能」「技」そして「熟練」の四語を20種の辞書から「最もわかりやすく一般的で、納得できる説明」を検討したもので、特に「技術」「技能」について両者の説明に含まれる「ワザ」を媒介に「技術」を「ワザの表現」、「技能」を「ワザの実行」という2つのコトでそれぞれの説明として結論づけている。(図1)

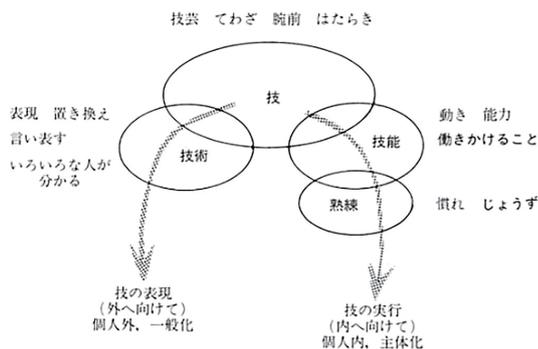


図1 用語の相互の関係

この辞書からアプローチするところが面白く、同じ方法で、ただし少しずれた位置からアプローチしたら、何かしら別な側面が見えるか考えてみることにした。

## 2. 狙いは「技術」と「技能」二語の違い

元々「技術」と「技能」には、「雑感」の結論にあるような、明瞭な区分けを可能にする「違い」があったのだろうか。あったとすれば、それは何か。

本稿では「技術」と「技能」二語を比較し、その疑問を明らかにしたい。

## 3. 少しずれた位置から

さて、[雑感] では国語辞典、漢和辞典、百科事典とかなりの幅の辞書を動員している。本稿では幅から離れ、時間に着目し、その語の深部(元の了解)にどのような意味があったのかを考え、「技術」と「技能」の違いを探ることとした。

使用する辞書と使う順序は、語源辞典<sup>b)</sup>を入り口に古語辞典<sup>c)</sup>、時代ごとの辞典、そして「明治のことば辞典<sup>d)</sup>(東京堂出版)」という流れになっている。

なぜ最後に明治のことば辞典を使うのかであるが、西洋からの情報が集中した明治期に、意味・用法が変わった語、新語、もしくは翻訳語、が多数現れた。これらの語の中から明治時代の語を濾し出すフィルターとして、明治のことば辞典を使っている。

また、語の説明(意味)は時とともに移ろうものなので、語源辞典の説明を、基底として考えることにする。

#### 4. 語源辞典を入りに

語源辞典で「技術」および「技能」を引いてみると以下のような説明となっている。

「技術」

- ・中国語の「技」(手のわざ)と「術」(すべ)の組み合わせが語源
- ・意味は：理論を実際に応用する わざ

「技能」

- ・中国語で、「技芸」と「能力」の組み合わせが語源
- ・意味は：技芸を行う うでまえ

どちらも中国語にその祖がある語、また その組み合わせであるところに外国由来の訳語に当てた匂いがする。

では次に、古語辞典でそれぞれ何時ごろからある語なのか調べてみたい。

「技術」

- ・掲載なし

「技能」

- ・徒然草七十五段<sup>1)</sup>に掲載
- ・意味は：物事を行うために身に着けた うでまえ

ちなみに徒然草七十五段の掲載箇所は、天台大師智顛(中国天台宗の事実上の開祖)の主著である摩訶止観を引いているところなので、技能の領域<sup>2)</sup>が「技芸」であることがわかる。

また「技術」は古語辞典に載っていないため、江戸期、室町期の辞書を調べてみる。

江戸期

- ・掲載なし

室町期(時代別国語大辞典(室町時代編))

- ・玉塵抄<sup>3)</sup>三十五に掲載
- ・意味は：熟練した腕前

玉塵抄三十五「技術」掲載部は「関」の解説箇所「武芸ニスクレ奇特ナ技術ノアル者」とある。

なお当該部分が「技ノ術」<sup>4)</sup>となっているものもある。

ここで明治期に西洋の訳語<sup>5)</sup>で使われていないか明治のことは辞書を調べてみる。

「技術」

- ・英和対訳袖珍辞書：art(文久2)
  - ・独文典字類：Kunst(明治4)
  - ・文典理学地学三書字類：art(明治5)
  - ・大全漢語字彙：技芸(ワザ)二同ジ(明治5)
  - ・漢語字林大成：テワザ(明治9)
  - ・新撰玉篇：ワザ、技芸モ同(明治10)
  - ・必携熟字集：ワザマヘ(明治12)
  - ・五国対照兵語字書：Technologie(明治14)
  - ・日本立志編字引：ショサ(明治15)
  - ・学校用英和字典：art(明治18)
  - ・漢英対照いろは辞典：技術、てのわざ、くふう、技術、わざ。Arts artifice(明治21)
  - ・言海：ワザ。学ビテ得タルワザ。(明治24)
  - ・日本大辞典：芸ノワザ(手業ナドニイフ)。-「蒔絵ノぎじゅつ」。-「絵画ノぎじゅつ」。(明治26)
  - ・和英大辞典：The arts; a handicraft; Syn. Waza。(明治29)
  - ・新案帝国用文：うでのわざ(明治30)
  - ・日本新辞林：技芸(蒔絵の一)(明治30)
  - ・ことばの泉：学び得たるわざ。げい。(明治31)
  - ・新編熟語字典：ワザシカタ(明治33)
  - ・和仏大辞典：Arts industriels, metier(明治37)
  - ・新式以呂波引節用辞典：学び得たるわざ(明治38)
  - ・訂増中等作文辞典：学びえたるわざ(明治38)
  - ・新訳和英辞典：Art; a useful art; technique。(明治42)
  - ・辞林：理論を実際に応用する手段。理想を実際に表現する熟練。わざ「蒔絵の一」(明治44)
  - ・新式辞典：学んで得たるわざまへ、芸術(大正1)
- 解説欄に

明治時代には、「蒔絵の技術」のように手わざの意味で、今日の「表現技術」とか「科学技術」のような使い方はみえない。

とある。

「技術」は明治期に、artの訳語<sup>6)</sup>として使われることで、その語源と領域を再び確かめたとと言えるのではないか。(その領域とは「手わざ」である)

なお「技能」は掲載がない。

## 5. 「技術」と「技能」の説明を比べてみると

語源辞典から得られたそれぞれの説明を以下に列記してみると

「技術」：「理論を実際に応用する わざ」

「技能」：「技芸を行う うでまえ」

さらに古語辞典などから得られた周辺情報を加味して考えをすすめると、「技術」は、理論を現実化することである。

理論の基となるとなる原理、法則といったものには、それが成り立つための条件があり、その条件の下で学んだことまたは教えられたことを現実化すること。これが「技術」の説明が示すところである。

次に「技能」であるが、領域は技芸<sup>7)</sup>になるが、その演目をうまく演じる力量のことであるわけだが、この「うまく演じる」をもう少し見て行くと、うまく演じるための条件が示されていないのがわかる。よってどのような条件においても「うまく演じる」ことを示している。

上記より得られる二語の構造であるが、「技術」はその内に、或る「条件」を含んでおり、この「条件」に一致しなければ、得られる成果は予期に反しても仕方がない。

よって常に「結果」を担保しているとは言えない。

つまり、或る「結果」を得るためには、或る「条件」が必須となる。これが「技術」の構造である。(図2)

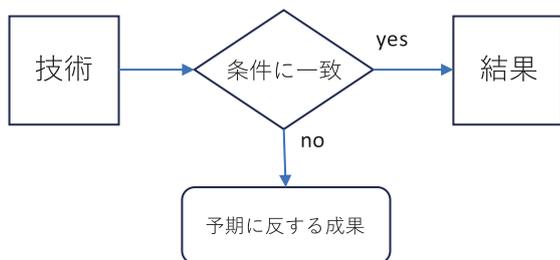


図2 「技術」の構造

対して「技能」は、「うまく演じる」ことしかなく、これはどのような「条件」においても「うまく演じる」ということで、「結果」の担保しかない構造となっている。(図3)



図3 「技能」の構造

はたして「技術」と「技能」の間には、常に「結果」を担保しているかいないか、という大きな相違点があった(当然、それぞれに領域はあるが、その境界は変わりやすく柔らかい)。

## 6. 続・辞書からみた「技術」と「技能」

さて、「技術」と「技能」の違いを、語源辞典を端緒に考えをすすめて、「技術」と「技能」二語の違いは、「無条件に「結果」を担保しているかいないかにある。」という結論<sup>8)</sup>に至った。

そしてこの結論はこの二語の深い(元の)層<sup>9)</sup>に属するものである。

ただし、二語それぞれに領域があることを付記<sup>10)</sup>する。

## 7. 付 録

ところで、図2を見ると「技術」から論理的と言える流れが見て取れ、ここから「科学的」または「科学と親和性のあるとした方が良い部分がある(または、あると感じる)」と言える。

一方「技能」は、図3にあるように「結果」だけが表に現れるまたは強調されるため、その過程で個々の工程は見えるものの、その個々をつなぐ調整や選択(図中破線部)が理解できないため、どうしても秘伝や奥義めいたものを見てしまう。

しかしやっていることは、あらかじめ用意をして、それに沿って行い、結果を得る、といった一連の流れであるわけで、そこに奥義があるとすれば、今で言う「管理」<sup>11)</sup>が含まれているからであろう。

## 注

- 1) 徒然草七十五段：<前略>未だ、まことの道を知らずとも、縁を離れて身を閑かにし、事にあづからずして心を安くせんこそ、しばらく楽しむとも言ひつべけれ。「生活・人事・技能・学問等の諸縁を止めよ」とこそ。摩訶止観にも侍れ。
- 2) 領域：対象としてもよいが、対象ほど輪郭が明確でないうえ、時間経過とともにその輪郭の位置や明暗が変わるため本稿では、影響の及ぶ範囲としての領域を採ることにした。
- 3) 玉塵抄：中国元のころ（1307年）に編まれた、漢字を韻で分類した書『韻府群玉』の日本語解説書として室町時代末に編さんされた書。  
なお「技術」が出てくるのは「関」の部。
- 4) 技ノ術：国立国会図書館本には当該段落に「技術」とあるが、比叡山本には「技ノ術」とある。後者は国立国会図書館本より後の写本とされる。
- 5) 明治期に西洋の訳語：明治期の訳語の多くは、当時の知識人（代表格は西周）が儒学や仏教用語である漢語からとったものが多くある。
- 6) artの訳語：artの訳語なら「芸術」ではと思われるが、明治期に「芸術」はartの内fine artまたは、より狭義なものの訳語で使われており、これより広い意味であるartの訳語として、「技術」が当てられている。
- 7) 技芸：[漢語] 歌舞音曲のわざ。  
(角川古語大辞典 角川書店)  
美術・工芸などの技術。の意が今では上位に出てくるが、本稿ではその趣旨からより古い時代での意である上記とした。
- 8) 結論：本稿はあくまで雑感であるが、あえて結論としてまとめると。
- 9) 深い(元の)層：冒頭の「少しずれた位置から」にあるように、本稿の議論は語源辞典を基底としているため当然結論も同様の層にある。
- 10) 付記する：「技術」と「技能」それぞれに領域があるが、その領域は変化しやすいため、より堅い「結果担保の有無」を主とした。そして、従である「領域」は付記とした。
- 11) 管理：この管理は、計画と監理から成っている。ここでいう監理は転んでから策を講じること。管理は転ばぬ先の杖を用意するコト。音は同じであるが意は異なる。(杖そのものではない。転ばないという結果が出れば杖でなくてもよい) また、「ここで転ぶだろう」と環境情報から仮説を立てる暗黙の力に、秘儀や奥義を見るのだろう。  
そしてこれが「うでまえ」の正体の一部であると考え。

## 出典（原則本文中表記のものは略）

- a) 「技能と技術」誌1995年1号 須藤 秀樹氏

## b) 語源辞典：

- ・日本語源広辞典 ミネルバ書房
- ・国語語源辞典 校倉書房
- ・続国語語源辞典 校倉書房
- ・語源辞典 東京堂出版
- ・日本語源大辞典 小学館

## c) 古語辞典

- ・角川古語大辞典 角川書店
- ・古語大辞典 小学館
- ・古語大鑑 東大出版
- ・古語辞典 旺文社
- ・古語辞典 学習研究社
- ・全訳読解古語辞典 三省堂

## d) 明治のことは辞典：

- 本書は「明治のことは」を選択するにあたり、
- ・明治時代に新しく誕生した語
  - ・明治時代になって意味の変化した語
  - ・明治時代に2つ以上の漢字表記や語形（読み方）のある語
  - ・明治時代の世相を反映する語
- という4つの観点から対象語を選択している。